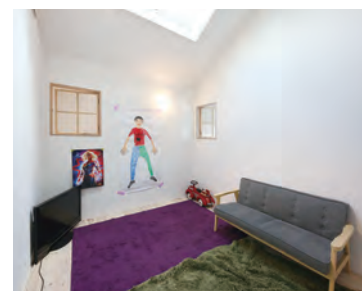
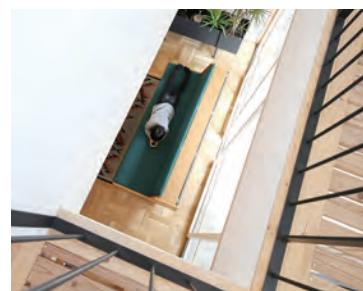
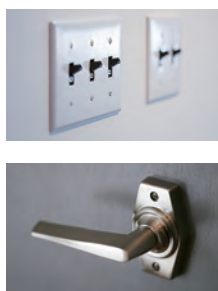
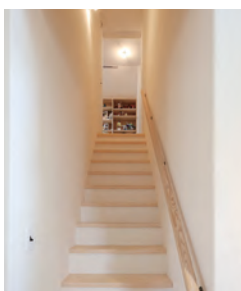


生活の余白

この心をくすぐるざっくり感、完全でないことの心地よさ。

「一番気に入っているのは、ダイニングから見たキッチンの景色」、と話す奥様。家の中で一番最初に、このキッチンのデザインイメージを考えたのだという。でも、この家には「〇〇風」とか、ないんですよ」。引き戸とガラス戸のついた横長の戸棚は、わずかに北欧風のニュアンスもありつつ、昔ながらの団地や米軍のフラットハウスのようなわけでもない。

「あまり色を使いたくなくて」と、使う素材は可能な限り、木とモルタルと塗り壁の3つだけ。その使い方と雰囲気絶妙なバランスで組み合わせたり、スタイリッシュだけれどどこか懐かしい、居心地の良い空間を作り出している。だからといって、木とモルタルと塗り壁を使えば、どんな家でもこうなるわけではない。その違いはどこにあるのだろう。



「僕の大好きな建築家の方が設計したカフェを参考にしたんです」とご主人が嬉しそうに説明してくれたのは、キッチンからダイニングを見た景色。わずかに幅の異なる材木を並べて作られた存在感のある壁が、リズムカルで心地よい。

ダイニングテーブルや収納、スタディールームの造作は「切ったままで使っちゃっています」と言われてよく見ると、木口と呼ばれる部分は本当に切ったそのまんま。本来であれば隠したり、整えたりするであろうところをありのままに見せるやり方は、ともすれば伝統を重んじる向きには受け入れがたい。でも、これから家を建てる世代には逆に新鮮に映るのだろう。そしてこのざっくり感が、どこかわたしたちの気持ちを楽にしてくれるのだ。

また、ドアノブや明かりやスイッチに至るまで、使っているパーツはインダストリアルデザインのもものが大部分を占める。余分な装飾が排除され、機能のみを追求したそれらを用いた理由は「流りのものより、いいものを使いたいから」とご主人は言う。そういつたあえて作りこんでいない部分というものが、この家には随所に見受けられる。ある意味余白とも言えるそれが、この家の懐かしさや居心地の良さにつながっているのではないだろうか。

「完全なカタチでお客様に渡す、ということはしないようにしています」と話すのは、この家を設計したエフリッジホームの遠峰輝行さん。

「家を完成させるのはお客様ご自身だと思っています。その空間で生活しながら、どうなっていれば暮らしやすいのかを考えて、決めてくればいい。シンプルなものを使っているの、すぐに直せますしね」と輝行さんは笑う。例えば、いろいろ貼ったりいじったりできないと思われがちな塗り壁は、実は画びょうも刺せるし、直すのも簡単。それをぜひ体感していただきたい、と自ら自宅で実践し、お客様にお勧めしている。実はこの家、輝行さんのご自宅なのだ。

「この家を建てたら、家の中にいらないものがたくさんあることに気づきました」と話す奥様。東京に住んでいるときはものに囲まれて暮らしていたけれど、この家に住むようになって、「自分が本当に好きなものを見つけて、それを大切に使うようになったんです」。

新しいもの、完璧なものもいいものとは限らない。自分たちにとって心地よいものやことを一つひとつ吟味し、生活の余白に少しずつ加えていく。心地よいものが変わったり、違ったりしたときはやり直せばいい、それだけのこと。それが、この家と暮らしを楽しむ、ただ一つの秘訣に違いない。